

北前船の到来

土崎は、1700年代半ばから1900年代初頭にかけて、大阪と北海道を結ぶ交易路の重要な中継地として繁栄した。日本海の都市や町を結ぶこの航路を往来した木造の商船は、北前船と総称され、物資、文化、情報の交流を促進した。この交易によってもたらされた富により、土崎の商人の中には、社会的に上位階級にあった武士よりも裕福になった者もいた。

航路が最初に開かれたのは1670年代のことだが、独立した商人が船をチャーターして商品を輸送するようになった1700年代半ばに、北前船による交易が活発になった。彼らは単に大阪から北海道へ荷物を運ぶだけでなく、航路の各港で積極的に商品の売買を行った。彼らは航路沿いの価格差を利用し、その知識と経験を生かして価格を設定した。彼らの貿易戦略は利益を生み、1回の往復で現在の価値にして1億円もの利益を生み出すこともあったといわれている。

最も人気があった商品のひとつは、北海道沖で捕れたニシンだった。ニシンは食料源としてだけでなく、発酵させて豊かな肥料を作り出すこともできた。また、電気のない時代には貴重なランブ油の原料にもなった。これらの加工品は、魚の原価の5倍から10倍の値段で売ることができた。

港周辺の史跡

18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて描かれた絵巻物『秋田街道絵巻』の中で、土崎は活気のある港として描かれている。荻津勝孝（1746～1809 年）の作品とされる 3 巻の絵巻物からは、200 年以上前の港町の生活を垣間見ることができる。荻津が描いた建造物のうちのいくつかは、現在も残っている。

絵巻の 1 つの場面には、海岸を見下ろす丘の上に石塔が描かれている。この石塔は、港に入港する船乗りたちの目印となっていたと言われている。1643 年に裕福な商人によって建立されたこの石塔は、1804 年と 1810 年の地震で倒壊した。その後、1967 年に同じデザインの石塔が移築された。

また、この巻物には宝塔寺の御影石の塔も描かれている。この塔は、土崎へ入港しようとした商船が突如嵐に見舞われたという出来事をきっかけに 17 世紀から 18 世紀の間に建てられた。船は難破寸前だったが、そのとき突然寺の近くに不思議な光が現れ、光に導かれて船は無事に陸地へとたどり着いたと言われている。商人たちは、この導きの光は寺の守護神が与えてくれたものだ信じ、感謝の印として五重塔を建てるための資金を寄進した。

土崎みなと歴史伝承館では、来館者がデジタル版の巻物を閲覧し、現在も残る他の史跡を
見つけることができる。